

三 ローレツ先生——ドイツ医学の普及

1 民族地理学研究のための来日

◆ウィーン大学医学部出身の医学博士

ローレツは、オーストリアの生まれでした。貴族の称号であるフォンを付してフォン・ローレツというから、貴族の出であることがわかります。ローレツ家は、チェコとの国境に近いホルンにブライテナイヒ城を所有していました。

ウィーン大学医学部に学び、内科学位と外科学位を取得しました。ウィーン大学医学部といえば、このころ世界の最高水準にありました。ローレツはここで数多くの科目を修めましたが、なかでも解剖学を大量に履修したことが、医事・衛生行政を履修したことがめだつています。

ウィーンにある癲狂（てんきょう）院の勤務医をへて来日するのですが、お雇い医学教師として招へいされたわけではありません。実は、博物学への強烈な関心からかれて東アジアへの調査研究旅行を意図し、その調査旅行を円滑かつ安全に遂行するために、公使館付き医官とい



ローレツが学んだウィーン大学医学部
(名古屋大学博物館教授西川輝昭氏提供)

う官職について、やって来たのでした。叔父が東アジア弁理公使として赴任するとき、随伴してきました。

明治はじめに来日した外国人のなかには、政府の命をうけ、対東アジア貿易振興政策の一環として物産や商工業を調査するという目的をもって来訪し、日本の各地を旅行する者がありました。ローレツの場合はちがつていました。市場調査というよりむしろ、個人的な博物学研究調査という目的からなのでした。

来日は明治七（一八七四）年一月二六日。アメリカを経由し、太平洋航路で横浜へやってきました。

ローレツ来日の一年前、かれの住むウィーンでは万国博覧会が開かれていました。日本

◆ 横浜における医院の開業

来日した翌年の三月、早くも念願の調査旅行をくわだて、西日本へむかいました。内地旅行免状の申請記録には、かれの官仕身分は医師、旅行趣意は「学術研究」、旅行先および路筋は「大阪京都九州四国大和伊勢尾張美濃信濃甲斐」、そして保証は「公使ノ保証」とあります。

この西日本探検旅行より戻つてから、横浜滞在中に医院を開業しました。

「今ハ漸く盛に洋医を信仰する事に成り志かハ西洋よりも益々上手の医師が出て来ます當時横浜九十二番に滞留する澳地利国の医師ドクトル、ホン、ローレツ氏ハ彼国に於て既に諸人の尊信する上手なりしが日本へ来りても手際の程を知りて矢張人々にもてはやさるゝより此度新たに規則を立て日々午前九時より十時迄午後二時より三時迄診察を許し中外患

僕今般當港ニ於テ廣ク醫術ヲ施サント欲ス
 病患ノ者ハ乞フ速ニ來テ診察ヲ受ンコトヲ
 診察自午前九時十時迄午後自二時三時迄
 横濱九拾二番澳地利國匈牙利國公使館附屬
 醫官 ドクトル、フオン、ローレツ

ローレツの医院開業広告
 (『東京日日新聞』1875年12月16日)

政府がはじめて正式参加し、日本の物産や美術工芸品(名古屋城の金鯨など)の展示がヨーロッパのジャポニズムを刺激したという博覧会でしたが、ローレツも日本探訪心をおおいに刺激されたであろうと考えられます。

者を問はず専ら治療を施すと云ふ」

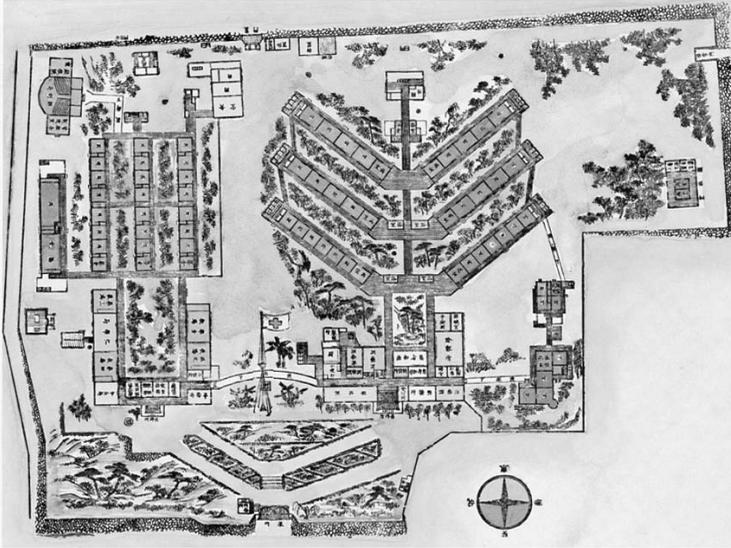
『郵便報知新聞』（明治八年二月五日）には、このように報じられていますが、一か月あまり後の一二月一六日になると、今度は、ローレツみずから、『東京日日新聞』に別掲のような広告を掲載しています。オーストリア・ハンガリー公使館附属医官でありながら、医院を開業するというのです。附属医官といっても、無給の名誉官職であったからだと思われれます。

2 愛知県公立医学校のお雇い医学教師

◆雇用契約

やがて愛知県からお雇い教師の口がかかり、一八七六（明治九）年五月、公立病院および公立医学講習場へ着任しました。三〇歳のときでした。

雇用契約によれば、ローレツの任期は一八七六（明治九）年五月一日から一八七九（明治一二）年四月末日までの三年間でした。月給は三〇〇円。横浜と愛知県のあいだの往路・復路の旅費として、それぞれ五〇円が支給される。これに住宅一軒の宿料として一か月六円五〇銭を加える、という条件です。当時、愛知県令安場保和の俸給は月額二五〇円であったのですから、ローレツの場合も、厚遇ぶりがうかがわれます。三年の任期が満ちるとき、さらに一年間、



愛知県公立病院・公立医学校の平面図
 (『愛知県立医学専門学校校友会雑誌』34号、所収)

契約が延長されました。四年目は月額四〇〇円に増額されています。

◆堀川端の医学校

ローレツが赴任したころ、ちょうど、名古屋・天王崎町の丘陵地に病院・医学校の建築が着工されたところでした。堀川東岸の、洲崎神社がある北側あたりです。西本願寺別院にあつた医学講習場は仮住まいであり、手ぜまになつたからです。「この病院・医学校のマスタープランは・・・ヨングハンスが自己の見聞に基づき、様々助言したこともあつた」と推測されています。一八七七(明治一〇)年七月一日には、盛大な落成式がおこなわれました。

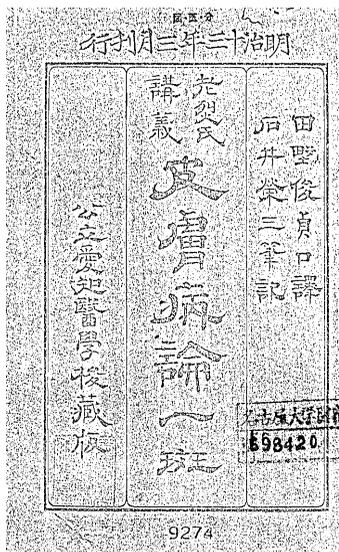
敷地はおよそ五七〇〇坪ありました。堀川河畔の街路に面した表門をはいり、植えこみにかこまれた爪先あがりの道を右に登ると病院（公立病院）が、左にとると医学校（公立医学所、のちに公立医学校と改称）がありました。石の門柱には、それぞれ愛知県病院、愛知県医学校という札がかけられていました。

新装なった病院と医学校は、出入り口や窓枠にアーチがふんだんに取りいれられていました。木造構造にしつこい塗り、ガラス窓、二階建ての擬洋風建築で、堀川河畔の高台に偉観をほこっていました。世間では「河の病院」と呼ばれ親しまれました。

この病院と医学校で、ローレツは、求めに応じて学識と腕前をいかんなく発揮しました。一八七八（明治一一）年二月には、下顎の骨の癌におかされた青年に大手術をほどこしました。翌年の春には、尿道結石に苦しむ幼児の命を救っています。その都度、地元紙は施術の景況を報じています。

◆『皮膚病論一斑』

治療のかたわら、外科通論、婦人病論、皮膚病論、梅毒病論、産科学、断訟医学（法医学）、内科臨床講義、外科臨床講義を担当し、世界有数といわれたウィーン医学の普及につとめました。



『老烈氏講義 皮膚病論一班』
(名大附属図書館医学部分館蔵)

このうち、皮膚病論の講義は邦訳され、『老烈氏講義 皮膚病論一班』(明治一三年三月)として刊行されています。F・ヘブラが創始した最新の皮膚科学の一端を、わが国にはじめて紹介した書物として知られています。

当時、先進的な文物を導入し教授しようとするさい、専門用語にどのような訳語をあてるかが大きな問題でした。本書でも、たとえば、丹毒たんどくに「羅斯」という訳語をあて、これに原名(Erysipelas)とそのカタカナ読みであるエリシペラスを併記するなど、西洋医学移入期の苦心がしのべれます。

◆ 「愛知県病院手術図」

「愛知県病院手術図」といって、五名の日本人医師や医学生に、ローレツが外科手術の実地指導をしている絵が残っています。絹地に浮世絵手法で着色されています。為、学士老烈先生嘱、方洲弘図」とありますように、愛知県出身の浮世絵画家・柴田方洲(名は弘)が、ロー

レッツに委囁されて筆をとったといわれています（本書の表紙参照）。

極彩色のタイル張りの室内。ガラス窓近くにある一基のベッド。そのベッド上の患者の右上肢に、ざんぎり頭の青年が片ひざ立ちになってメスをあて、今まさに切断しようとしています。この青年こそ後藤新平（一八五七―一九二九）と思われまふ。そのかたわらで患者の腕を支えているのが、司馬凌海と伝えられています。調度からも色調からも、明治の香気が強く漂ってくるようです。

ローレッツはというと、麻酔係で手術の介添え役。スキネルのマスクをつけ、クロロホルム麻酔をほどこしています。袴を着用し、たすき姿の禿頭の老人として描かれています。老烈という名にちなんで禿頭に描かせた、というのだからおもしろい。それに、ローレッツは禿頭で和服姿であるのに、日本人の方はざんぎり頭、洋服姿で描かれていますから、その対照がきわめて象徴的であります。

この絵は日本医事文化史料として貴重であり、日本医史学会編『図録日本医事文化史料集 成』第二巻（一九七七）に収められてもいます。

◆司馬凌海と後藤新平

「愛知県病院手術図」に描かれた司馬凌海は、一八七六（明治九）年五月、ローレッツと一緒に



ローレツと後藤新平（『写真集 名古屋大学の歴史1871～1991』所収）

に愛知県に招かれました。職名は「副教師
通弁兼医校教師」とあり、ローレツの通訳
もつとめました。

ローレツと司馬凌海が招へいされたところ、
愛知県病院は愛知県公立病院に、医学講習
場は公立医学所にその名を改めました。病
院、医学校としての面目を一新し、体裁を
ととのえ、その基礎はいよいよ確立される
に至りました。

ローレツの着任を機に、授業で使用する
原書が英語の本からドイツ語の本に変更さ
れ、教授内容は英学からドイツ学に転換さ
れることになりました。ローレツはドイツ
語でドイツ医学を教えたのですから、生徒
は訳官の通訳を介して学んだのでした。公
立医学所の規則等もあたらしく整備され、

試験により生徒の等級を定めたり、各学科の免状をはじめ授与することになりました。

以来、隆盛にむかいその名がぜん高くなったところ、福島県からやってきたのが後藤新平です。後年、板垣退助が岐阜で遭難したとき、かけつけて治療したその人です。

大志があり、烈々と燃える功名心があつたこの後藤を、ローレツは自分の後継者と考え、その薫陶に全力をあげたものです。

自分はいくまでお雇い外国人である。契約した年限をつとめ、約束の報酬をえて帰国すればそれでよいが、自分としては、良医を養成して将来の公益をはかりたい一念である、という思いで育てたのでした。

後藤が病をえて、赤松が一带につづく八事山に静養することになったとき、ローレツは病気の治療から食事の世話まで、親身の温情をかたむけたといえます。そのような二人の水魚のよな交わりは、後藤の女婿である鶴見祐輔の著書『後藤新平』（一九六五）に、描かれています。

◆ 学術雑誌『医事新報』の出版

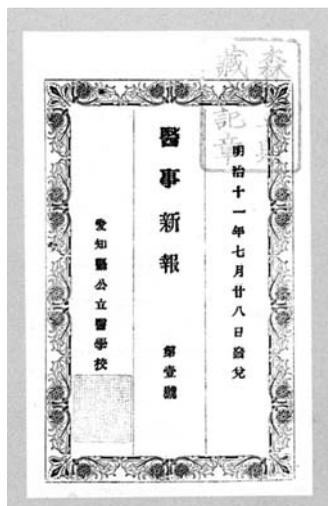
ローレツの講義や指導内容は、出版物をとおして広められたことが注目されます。『老烈氏講義

皮膚病論一斑』という図書が出版されたことは前に述べましたが、図書だけでなく、『医事新

抄訳も掲載されています。

『医事新報』のはじめのころの紙面をみると、断訟医学の講義内容がひんばんに収録されています。警察上の医事に関する診断や解剖にかかわる講義です。

ローレツは学内や病院内での医学教育や診療活動だけでなく、校外にでて警察上の医事に関する診断、解剖にも関与していましたので、そのときの自験例をまじえながら講述したのが、この断訟医学の講義でした。これらの講義も、やはり開業医や警察官にも開放されていました。



『医事新報』創刊号

(『写真集 名古屋大学の歴史1871～1991』所収)

報』という学術雑誌も刊行されました。ローレツの指導のもとに編集され、一八七八(明治一一)年七月二八日に創刊されました。当初は毎月一回、一八八〇(明治一三)年三月からは毎月二回の割合で発行されています。一部五銭で販売もされました。これこそ本学最初の定期刊行物と考えられます。ローレツの講義記録や臨床治療の報告のほか、海外の新薬の紹介や医学雑誌の

稟告 あらせ

僕に素古器物ヲ嗜ム幸イニ貴地ニ聘ヒラル、ヲ以テ遍ク之ヲ購求セント願クハ諸彦割愛ノ情ヲ辱フセバ品種多少ヲ問ハス弊寓ニ携ヘ來ランコトヲ是請フ

第一區七前津町地當三百十八番
愛知縣病院教師
塊地利國概略
ドクトルルフオンローレツ

漆器類
銅器類
陶器類
武器類
玉器類
土偶人類
珍禽奇獸虫魚貝類
石類
化石類

追々余カ名義ヲ以テ物品ヲ取取スル者有テ時日ヲ經ル后代價ヲ請求スル人有甚ク以テ不都合ニ付向來余カ押印シ注文スル歟又ハ自ノ注文セルモノ、外ハ必ス取合冊之様致慶且又代價ハ該日内ニ要求相成慶仍ア此段普告ス

愛知病院教師
ドクトル、ローレツ

古美術・博物収集のための稟告
 (『愛知新聞』1876年10月2日、1879年11月12日ほか)

◆ 博物学の調査研究

もともと、博物学の調査研究を意図して来日したローレツのことです。お雇い教師として定められた本務の余暇に、念願の資料収集や調査研究につとめたことはいまでもありません。

地元紙の『愛知新聞』や『愛岐新聞』に何度も広告を出して、古美術品や化石類、珍禽（ちんぎん）奇獣虫魚貝類などの収集につとめました。そうした収集ぶりは悪用され、ローレツの名をかたつて物品を買いつける者まであらわれたほどでした。弱りきつて、今後は自分が押印し注文したものを以外は支払いをしない、という新聞広告まで出しています。

そのころ、愛知県といえば、骨董品の

名だたる土地として、外国人に知られていました。なかでも「大きな藍色の模様をついた尾張の陶磁器」と、「優雅な七宝のほうろう鉄器」の製造地として有名で、ここに来るとかれらの収集癖は「抑えがたい欲望」になったようです。G・ブスケ『日本見聞記』やE・W・クラーク『日本滞在記』にも、そのことが記されています。ローレッツの収集品のなかにも、これらの古美術品が含まれていたにちがいません。

当時、外国人でも、外務省が発行する通行免状があれば、日本の事物に関する学術的な調査研究のために、内地旅行することが許されてきました。ローレッツがこれを活用しないはずはありません。

来日早々から、先に述べたように、かれは内地旅行免状を手に入れ、大阪、京都、九州、四国、大和、伊勢、尾張、美濃、信濃、甲斐に、資料を求め歩いたのです。そのさい、京都では生糸と陶磁器の調査に没頭し、大阪では貨幣の収集につとめ、貝や蟹のほか昆虫などを入手しています。その後、神戸から長崎にむかい、有田では陶磁器を調査したし、熊本近くの大島ではめずらしい三味線貝を採取しました。長崎では貝象眼を手にして楽しんでます。その成果は、「日本南部旅行報告」（一八七五―七六）という紀行文にまとめられています。

愛知県雇いになってからも、休暇を利用しては各地を採訪しました。一八七七（明治一〇）年七月には一か月の予定で北海道へ旅立ったし、一八七九（明治一二）年の暑中休暇にも、一

か月間、函館まで出むいています。博物学調査と資料収集もかねた旅行であったと思われる。一八八〇（明治一三）年七月にも、暑中休暇中の学術研究を目的とした旅行免状を申請しています。

調査旅行の成果は報告論文となつてあらわれました。先の「日本南部旅行報告」という紀行文のほか、つぎの三篇が知られています。短い報告ですが、母国オーストリアの新聞や雑誌に寄稿しています。

「日本における樟腦の製造」（一八七五）

「日本の漆器」（一八七六）

「日本における鳥の飼育上の諸問題」（刊年不詳）

ローレツは動物標本の採集者としても、知られています。マボヤ (*Halocynthia roretzi*) やカネコトタテグモ (*Anthrodiatus roretzi*) の学名には、ローレツという名前が含まれているのです。

◆日本趣味

ローレツは六尺豊かな巨漢であり、口とあごに濃いひげをたくわえていました。額がすこし禿げあがっていたことからか、「老烈」という日本字を愛用しました。「魯列」とか「魯劣」

とかを、好んで墨書することもありました。

すこぶる日本趣味の人でして、茶の湯、生け花をたしなんだほか、香道を蜂谷宗意に学びました。名古屋市西区の宗像神社近くにある蜂谷家では、いまでも伝統が守り伝えられており、この静かな香室でローレツは香をきいたのでした。

刀剣にも興味をもち、旧尾張藩士の尾崎忠景に師事して、その鑑定法を学ぶことがありました。このほか、古美術品を収集するなど、とにかくローレツは日本の生活と文化にとっても強い関心をいっていました。新守座の狂言「道成寺」を見にでかけたという記録もあります。中村芝翫による白拍子の舞に感心し、祝儀にそえて一筆したためています。

◆愛知物産博覧会への出品

博物学に関心をもち、古美術品の収集を趣味としたローレツです。そのころ開かれた博覧会には、足しげく通ったはずですが、明治期、政府が殖産興業政策の一つとして勸業博覧会をひんばんに開くと、それに応じて、府県や民間主催の博覧会が各地で開かれたのですが、名古屋でも、一八七四（明治七）年につづいて、一八七八（明治一一）年の九月一五日から五〇日間、下茶屋町の東本願寺名古屋別院で開かれました。

この愛知物産博覧会で展示された物品はすこぶる多く、三万余といわれました。ローレツは



ローレツの肖像
 (『写真集 名古屋大学の歴史
 1871～1991』所収)

これらを参観したのみならず、自分も、アルコールに浸した八か月と四か月の胎児などを出品したという事です。

日本滞在中に収集した古美術品などの物品は、故国の博物館などに送られました。ローレツ自身の手で持ち帰ったものもあります。それらのうち何点かは、ローレツの死後、オーストリア政府によつて買いあげられ、現在、ウィーンの国立民族学博物館に、古墳時代の耳飾りなどが残されています。

3 医療行政に関する建議・提言

◆汚水排導法の建議

ローレツは県や学校当局に、種々の献策をなしています。なかでも汚水排導法の建議、健康警察医官設置の提言、癲狂(てんきょう)院設立の建議、の三件が注目されます。

最初の汚水排導というのは下水道のことですが、これの施設を建議したのはコレラの流行にかんがみでのことでした。コレラは一八七七(明治一〇)年八月、清国から長崎にはいり、た

ちまち関東地方まで流行しました。猛威をふるって、全国で八〇〇〇余名の死者がでました。愛知県でも、コレラ騒動はそれはそれはいへんなものでした。村社・郷社での安全祈禱、コレラ病用心薬の宣伝、コレラ退散を願ったドンチャン騒ぎなどがみられました。当時といえ、コレラの猛威に対して、隔離するか石炭酸で消毒する以外に手だてがありませんでした。内務省衛生局でさえ、黄色の布に黒く「コレラ」と書いた旗を隔離病院にたて、その境界に制止棒を立てるといふ程度であったのです。

このようなコレラ騒動のなか、防疫について指導を求められたのでしよう。ローレッツは『虎列刺病予防法報告』や『虎列刺病新誌』を著わし、これを管内に頒布したのでした。飲料水と生活排水を区別すること、便所に近い井戸水はよくないことを説く一方、環境衛生の浄化の立場から、県に「汚水排導法」を建議したのです。これは容れられて、汚水排導溝のモデル設備が病院・医学校内につくられることになりました。

名古屋は古くから下水道がよく普及していますが、その遠因はローレッツにさかのぼると称えられています。

◆健康警察医官養成の提言

コレラ騒動が契機となったのでしよう。ローレッツは、立ちおいていた県下の公衆衛生行政



ローレツの設計した精神病室
 (名古屋大学医学部精神医学教室『教室五拾年史』1958、所収)

の実態に注目し、健康警察医官を設けて、民衆に対する日常的な指導と取り締まりをすることの必要性を説くこととなります。「健康警察医官ヲ設ク可キノ建言」がそれです。これはローレツの所説を後藤新平が翻訳し編集したもので、後藤により県に提出されました。

後藤は、これをさらに発展させて「愛知県ニ於テ衛生警察ヲ設ケントスル概略」を、内務省衛生局長の長写真齋にあて提出したのでした。衛生行政の高い見識は、後藤を介して政府の政策に反映することになります。

◆癲狂院（精神病院）設立の建議

最後は「癲狂院設立の建議」です。当時、癲狂つまり精神病者はキツネつきとか悪霊つきとかいわれ、その待遇は陰惨をきわめていました。家庭でも社会でもまったく人権が認められていなかったことに心を痛めたローレツは、それが病気であることを説き、一般患者なみに保

護・収容し、これに治療を加えて社会復帰させるべきである、と考えたのでした。

この建議も容れられて、院内の南東、洲崎神社のわきに、ローレツの創意工夫になる癲狂室が設けられました。一八八〇（明治一三）年四月、任期満ちて離任する直前のことです。

「此造営ハ本院教師『ローレツ』独、英、仏等諸国ノ築造ヲ斟酌シ我国ニ適セシメ創立スル所ノモノニシテ我国諸府県ニ於テ未タ曾テ有ラサル所ノ者ナリ」

と、『愛知県公立病院及医学校第一報告』に記されています。わが国初のヨーロッパ式癲狂室というのです。

その癲狂室は小規模ながら、かなり広い畳の床、鉄格子窓、換気および光線遮蔽透射装置、室内監視用のガラス窓のついた戸など、患者擁護のための配慮が払われていました。欧州諸国の枠を集めて考案した、斬新で周到な構造でした。

◆公立医学校の学則の制定

ローレツの指導性は、医学校の学則の改正整備やカリキュラムの編制において顕著でした。病院・医学校の新築移転につづいて、一八七八（明治一一）年二月には新規則の制定がすすめられました。『名古屋大学五十年史 通史一』に具体的に記述されていますように、「学期、教授科目、学級編成、試験方法等医学教育の根幹部分についてはローレツが主となり、オース

トリアにおける被医学教育体験などに基づいて構想し」たものでした。

そのうち、カリキュラムについては、他校とはちがった大きな特色がみられます。科目目数と総単位数の多さ、病理解剖学の重視、臨床医学における皮膚科学系の重視、衛生警察学や断訟医学という社会医学の開講、の四点です。これらは「ローレツが医学を学んだウィーン大学医学部の特色」であつたのです。田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』では、これを「愛知県公立医学校における新ウィーン学派医学の受容」と名づけています。

◆惜別の辞

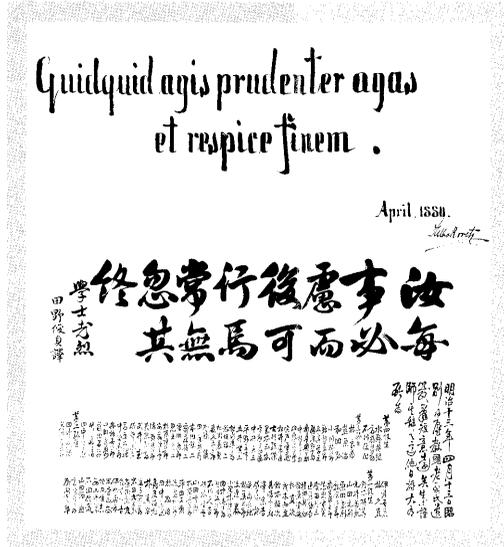
任期満ちて離任するにあたり、ローレツが残したラテン語の箴言しんげんがあります。

「*Quidquid agis prudenter agas et respice finem*」

といて、『ローマ人行状記』第一〇三話のなかにある箴言ということです。「なんじ常に謹んで事をなせ。その終わりをゆるがせにするなかれ」という意味であつて、これに

「汝毎事必慮而後可行焉常無忽其終」

という漢訳と、その下に在校生九三名の名前が墨書された大幅の掛軸が、名古屋大学附属図書館医学部分館に残されています。のちに赴任した山形では、「急がば廻れ (*Eile mit Weile*)」という箴言を残していますが、短兵急に西洋医学の成果だけを吸収しようとした日本の姿勢に、



ローレツの惜別の辞
(名古屋大学附属図書館医学部分館蔵)

警鐘を鳴らしたことばとして、まことに意義深いものがあります。

一八八〇（明治一三）年四月一三日という日付が入っていますから、名古屋・熱田の水月楼で開かれた送別の宴のときに、院長代理の後藤新平による送辞に
 応えて、関係者に諭告したものと伝えられています。

ローレツは、四年間、学識と情熱をもって医学教育と社会医療に従事し、西洋医学の真味を愛知県下に広めました。県はその功績に対し、金六〇〇円を贈って慰勞しました。

4 地方におけるドイツ医学の導入

◆金沢と山形のお雇い教師

ローレツの活動は愛知県にとどまりませんでした。金沢、山形からも招かれています。

まず、金沢医学校（いまの金沢大学医学部）の教壇にたち、一八八〇（明治一三）年四月末から八月までの短期間でしたが、衛生学・産科学・生理学・眼科学・裁判医学を講義しています。当地には、かつてオランダ人教師のP・J・A・スロイスとA・ホルトマンが雇われていましたが、ローレツの招へいを機に、金沢の医学教育はオランダ医学からドイツ医学に方向転換しはじめることになります。

つづいて、今度は、山形の済生館医学寮に招かれました。同年八月二〇日、海路を、金沢から酒田港をへて最上川をのぼり、山形に赴任したのでした。

山形県でも、西洋医学の新風を吹きこもうと、烈々たる気迫をもってやって来たにちがいありません。梅毒検査規則の制定や済生館改進黨などを県に建議しました。けれども、ここでは容れられることはありませんでした。貧弱な財政であるうえに、県令の三島通庸による土木事業に大きな負担を強いられているころであつたからです。一八八二（明治一五）年になると、招へいし支援してくれた三島県令が転出するし、県議会ではローレツ排斥決議まで可決された

のですから、居心地はよくなかったはずですよ。

趣味の狩猟だけは存分に堪能したようでした。また、野山が銀世界になると、故郷オーストリアにおもいをはせ、さつそくソリを作つてまちを滑るのを楽しむことはありました。けれども、きつと満たされぬ日々が多かつたにちがいありません。とうとう同年の七月二六日には山形をあとにしました。任期は、二か月あまりも残つていました。

◆ 勲五等双光旭日章

どうか日本のために、日本の医学界のために、立派な医者養成し、公益を将来に期したい。これがローレツの本懐でした。このような願いをいだいて、横浜、名古屋、金沢、山形と移り、地方医学の興隆に力を尽してきました。地方におけるドイツ医学導入の基礎づくりをしたという功勞に対し、勲五等に叙され双光旭日章が贈られています。

この叙勲のさい、愛知県はかれの履歷書と功勞調書を作成し、

「前後ノ両約期併セテ四ケ年間、能ク診治及教育ニ勉力シ……医学政事ノ改新ヲ図リ屢々

衛生警察上ノ建言ヲ呈シ、且ツ警察裁判医ニ係ル実事ヲ弁理シ、年々數回健病ノ実地解剖

ニ従事スル毎ニ医員教員生徒及開業醫師ニ示シ丁寧ニ教化シ……」

と称えております。



ホルン市シュテファーン教会にあるローレツ家の墓碑
(名古屋大学博物館教授西川輝昭氏提供)

◆ボヘミアの皇女との結婚

ローレツは、お雇い医学教師の任務を終えると、一八八二（明治一五）年八月一日に日本を離れました。

帰国してから、ボヘミアの皇女O・フォン・チェムシシエニコフと結婚し、ウィーンにあるサナトリウムの病院長になりますが、一八八四（明治一七）年の七月二〇日、心臓マヒのため急逝しました。享年三七歳。ホルン市フリートホーフ墓地にある、一族の墓に葬られています。

その墓碑には、ローレツの横顔のレリーフとともに、つぎのような碑文があります。

「アルブレヒト・フォン・ローレツ、

病院の院長にして、日本の医学学校の

内科・外科教授

一八四六一一八八四」

山形市の霞城公園にある郷土館（旧済生館本館）の前庭にも、かれのブロンズレリーフがあります。これは、右の墓碑からとった拓本をもとに作成されたものです。

◆文化交流・研究交流の進展

山形市郷土館には、右のローレッツ顕彰碑のほかに、ローレッツの遺品が数々展示されています。外科用器具、カバン、学生時代のテキスト、自筆の解剖図、鉗子使用法図、日本から持ち帰った写真など、生地ホルンのローレッツ家から寄贈された品々です。没後一〇〇年を記念して、日本・オーストリア共同によるローレッツ研究をはじめ、さまざまな企画もなされました。

ローレッツが日本滞在中に採集した動物標本は、順次ウイーンの王室博物館に収められました。現在はウイーン自然史博物館に引きつがれています。コレクションは「三五〇種以上を含む一四五〇点あまりの標本」から成り、海綿動物から哺乳類にまでおよんでいます。そのなかには、ローレッツの名前のついたマボヤの新種や、釣り餌として有名なユムシの標本群も含まれています。これらローレッツ・コレクションは、名古屋大学博物館の西川輝昭教授が中心となり、現地の研究者と共同で本格的な学術調査が始められ、その全容がようやく明るみになるうとしています。